

## 4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 水管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○水管理</li> <li>○かんきつ類の摘果</li> <li>○台風対策</li> <li>○病虫害防除</li> </ul> <p>1 か月予報では、平年と同様に晴れの日が多い見込みである(令和5年7月20日高松地方気象台発表)。無理をせず体調管理に気を付けながら作業を進める。</p> <p>気温が高く降水量が少ない8月のかん水は、樹勢維持や果実の肥大促進のために重要であるが、品質への影響も大きいため、園地や樹の状態に応じて適切に行うよう心がける。</p> <p>ア 温州みかん</p> <p>8月は果汁の糖含量が増加し、酸含量は減少し始める時期であり、この時期の土壌乾燥は糖含量を高めるのに有効である。しかし、極度に乾燥させると、酸高や樹勢低下を招くため、葉の巻き具合(葉の下垂や巻きが朝になっても戻らない)等を見ながら、7日間隔で10~20 mm (10~20 t /10 a) 程度のかん水を行う。</p> <p>イ 中晩柑類</p> <p>大玉果生産に必要な中晩柑類は、果実肥大促進のために、7~10日間隔で20~30 mm (20~30 t /10 a) 程度を目安にかん水する。特に乾燥で酸高となりやすい「ぽんかん」、「不知火」及び裂果が心配される「甘平」は土壌が乾き過ぎないように心がける。</p> <p>ウ キウイフルーツ</p> <p>キウイフルーツの葉は蒸散量を調節する能力が劣り、また他の果樹に比べて蒸散量が多いため乾燥に弱い。このため乾燥は葉の萎れや葉焼けの原因となり、ひどい場合には落葉を起こし、樹勢や果実肥大にも影響する。</p> <p>写真1 敷きわらによる被覆</p> <p>土壌の乾燥状態や葉の萎凋などの生育状況を観察しながら、3~5日間隔で20~30 mm (20~30 t /10 a) 程度かん水</p>



項 目	作 業 内 容																															
<p>(2)かんきつ類の摘果</p>	<p>を行う。また、敷わら、敷草を行い、土壌中の水分の蒸散防止を図る。</p> <p>エ かき</p> <p>8月に土壌が乾燥すると、果実肥大が劣り、収量に影響する。また、乾燥後の降雨で急激に土壌水分が変化すると、短期間に果実が肥大するため、ヘタスキ果の発生や、後期落果を招きやすい。そのため、10日間隔で20～30mm(20～30t/10a)程度のかん水を行う。</p> <p>ア 温州みかん</p> <p>着果量の多い樹では内成り果や裾成り果、小玉果、傷果などを摘果する。着果量の少ない樹では、9月以降に仕上げ摘果を行う。あら摘果を行っていない樹では、着果負担による樹勢低下と来年の着果を考え、8月上旬までに葉の枚数15枚に1果程度に間引く必要がある。</p> <p>極早生温州については、8月中旬から仕上げ摘果を行う。上向きの大玉果や日焼け果、小玉果、傷果などを除去し、葉の枚数20～25枚に果実1果を目安に、できるだけ下垂した果実を残す。</p>																															
	<p>イ 中晩柑類</p> <p>表1 中晩柑類の仕上げ摘果の目安</p> <table border="1" data-bbox="810 1227 1385 1821"> <thead> <tr> <th rowspan="2">品 種</th> <th colspan="2">仕上げ摘果</th> </tr> <tr> <th>開始時期</th> <th>葉果比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>伊予柑</td> <td>8月下旬～</td> <td>80～100</td> </tr> <tr> <td>不知火</td> <td>8月中旬～</td> <td>100～120</td> </tr> <tr> <td>ぼんかん</td> <td>9月上旬～</td> <td>80～120</td> </tr> <tr> <td>清見</td> <td>8月中旬～</td> <td>80～120</td> </tr> <tr> <td>せとか</td> <td>8月中旬～</td> <td>80～100</td> </tr> <tr> <td>はれひめ</td> <td>9月中旬～</td> <td>60～70</td> </tr> <tr> <td>愛媛果試第28号</td> <td>8月中旬～</td> <td>80～100</td> </tr> <tr> <td>甘平</td> <td>8月上旬～</td> <td>80～100</td> </tr> <tr> <td>カラ</td> <td>9月上旬～</td> <td>30～40</td> </tr> </tbody> </table> <p>8月が高温少雨となると、着果量の多い樹では乾燥ストレスがかかりやすいことから、樹勢が低下して葉巻や旧葉の落葉、果実の軟化が発生しやすくなる。そのため高温少雨が続く場合は、樹の状況に応じて早急に仕上げ摘果を行い、果実肥大の促進や樹勢の維持を図る必要がある。</p> <p>仕上げ摘果では、あら摘果で見落とした直果、日焼け果、果梗枝の太い極大果、傷果、奇形果などを除き、果実肥大の促進や収穫時の商品果率の向上を図る。</p>	品 種	仕上げ摘果		開始時期	葉果比	伊予柑	8月下旬～	80～100	不知火	8月中旬～	100～120	ぼんかん	9月上旬～	80～120	清見	8月中旬～	80～120	せとか	8月中旬～	80～100	はれひめ	9月中旬～	60～70	愛媛果試第28号	8月中旬～	80～100	甘平	8月上旬～	80～100	カラ	9月上旬～
品 種	仕上げ摘果																															
	開始時期	葉果比																														
伊予柑	8月下旬～	80～100																														
不知火	8月中旬～	100～120																														
ぼんかん	9月上旬～	80～120																														
清見	8月中旬～	80～120																														
せとか	8月中旬～	80～100																														
はれひめ	9月中旬～	60～70																														
愛媛果試第28号	8月中旬～	80～100																														
甘平	8月上旬～	80～100																														
カラ	9月上旬～	30～40																														

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 台風対策</p>	<p>8月は台風の襲来が多くなる時期であるため、事前対策を十分に行って被害を最小限とし、被害があった場合は、その状況に応じて事後対策をしっかりと行う必要がある。</p> <p>ア 事前対策</p> <p>(ア) 防風垣、防風ネット、排水路の点検・整備</p> <p>(イ) ハウスや棚等の施設やマルチの補強</p> <p>(ウ) 風による倒伏や枝折れを防止するための苗木や高接ぎ樹の支柱立て</p> <p>イ 事後対策</p> <p>暴風に伴い、潮風害の恐れがある場合は、早急（6時間以内）に樹体へのかん水（2～4 t/10 a）を行い、塩分を洗い流す。</p>
<p>(4) 病害虫防除</p>	<p>ア かんきつ類</p> <p>(ア) かいよう病</p> <p>伝染源となる発病果や発病葉は早期に除去し被害の拡大を防ぐ。強風雨により発病が助長されるため、台風の前にはIC ボルドー66D200 倍液等を散布する。</p> <p>(イ) 黒点病</p> <p>ジマンダイセン水和剤 600 倍液やペンコゼブ水和剤 600 倍液等を前回散布後の 30 日以内または 200～250 mm の降雨を目安に散布する。</p> <p>イ 落葉果樹</p> <p>(ア) かき炭疽病</p> <p>8月になると、果実では本病への感受性が高まり、降雨など発生を助長する要因が続くと、薬剤散布では十分に抑えることができなくなる。このため、予防散布、定期散布の防除を徹底するとともに、病斑のある枝は早期に除去する。薬剤防除では、オンリーワンフロアブル 2,000 倍液やトップジンM水和剤 1,500 倍液を散布する</p> <p>(イ) フジコナカイガラムシ（かき）</p> <p>8月は第2世代虫に対する防除適期にあたるため、必ず防除を行う。へたの周辺部や果実と葉の接触した部分、葉裏に寄生することから丁寧にモスピラン顆粒水溶剤 2,000 倍液等を散布する。</p>

(作成：果樹研究センター)